



日々好日は信心から

仏法
非遥

真如
非外

心中
即近

棄身
何求

日々好日

日々好日

日々好日

六七六号

(令和七年六月発行)

「いのち輝く未来のデザイン」をテーマに大阪関西万博が開催されています。

前回の万博は私の結婚の年でもあり忘れ難いものがありますが、たった一度半日で並ばなくていいパピリオンを駆け巡っただけでしたが、太陽の塔の印象は強烈でした。

その万博で携帯電話が初お目見えしたという。今やスマホなしの生活は考えられない社会になっています。

今回の万博は会場の周囲二キロの木造の回廊がいかにも日本的で人目をひきますが、猛暑の夏、入場者を酷暑から守る施設が不十分だとの声も聞かれ心配です。

空飛ぶ車が話題となっていますが、どうみても巨大なドローンにしか見えません。そのドローンは今や兵器として多くの人の命を奪っています。いのちを育む・守る・紡ぐなどとは正反対であることを思うと空飛ぶ自動車の登場も素直には喜べない。

また、いくつかの国のパピリオンの建設が開幕に間に合わなかったことも、いのちを拡げ・高め・磨き・響き合うこととは程遠い。

前売り券の売上げが予想を下回っているという。当初の予算を大幅に上回る投資をしたのですから、それに見合う成果を期待したいものです。何よりも「いのち輝く未来社会」の到来を望みたい。

弘法大師のお言葉

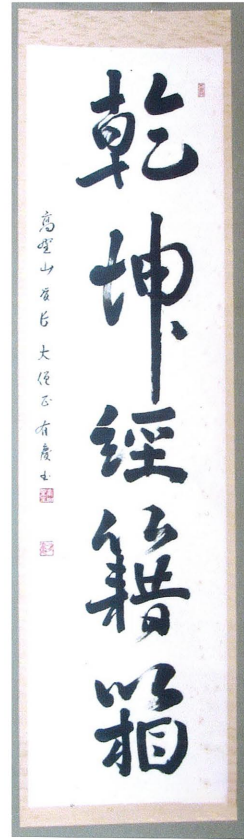
「法は人によって弘まり、人は法をもって昇る」

(秘蔵寶鑰卷第四)



天鬼云々：阿毘達摩經の一水四見の譬。餓鬼は水を膿血と見る、
天は瑠璃で莊嚴した地と見、人は清浄の冷水と見、魚は
住居と見る。

人鳥云々：釈摩訶衍論第四の所説。極闇の夜分に迦羅鳩奢那鳥は
ただ清浄光明の色を見、人はただ黒闇の色を見る。



この掛け軸の揮毫は、宗会議員在任時、時の管長松長
有慶猊下より頂戴したものです。

最後に「平安のマルチ文化人 空海」（頼富本宏著）
より抜粋させていただきました。

「現代からみれば古代人にあたる空海は、宇宙的な実在を
大日如来とみる密教の立場から、やはり聖なるものに常に
自分の身と心を集中し、それを思想と実践で表現したのが
垂直軸というべき即身成仏、つまり、「身に即して仏と成
る」というテーマであったのです。

そしてそれが可能であれば他の人もすべて聖なるものと
結びついているのであり、他とも同等同質の関係が成り立
つと結論つけた。」

春の華、秋の菊、笑って我に向えり。

暁の月、朝の風、情塵を洗う （性霊集巻第一）

四季折々の美しい大自然の中に身をおき、感性を瑩く
ことができることを喜びたい。お大師さまの御誕生をお
祝い致しますよう。

記念法要を前にした日々...

法蔵七十三年と題して清濁、美醜の歳月を綴つてまい
りましたが、移転して十年の歳月を経ながらも未整理の
品々も少なからずあります。

両親の遺

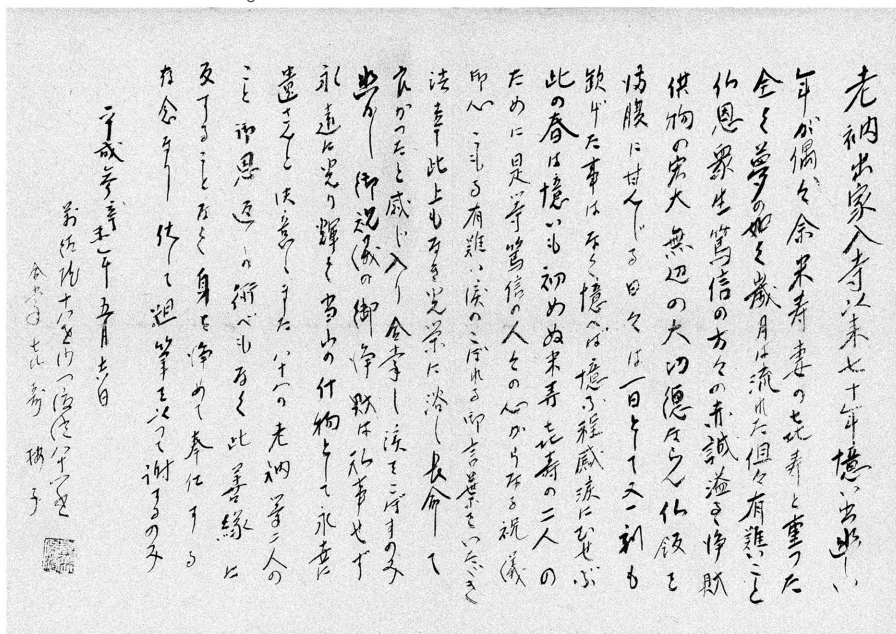
したアルバ
ムに折りた
たまれた藁
半紙があり
ました。

それは米
寿のお祝い
を頂戴した
お礼状とい
えるもので
したが、そ
の年が出家
七十年であ
ると書かれ
ていました。

それは僧
侶としての
いつわらざ
る心情の吐
露でした。

そこには

「祝儀の浄財は私事せず永遠に光り輝く当山什物として永
世に遺さんと決意しました。八十八の老衲等二人のこと恩
返しの際もなく、此の善縁に反することなく、身を浄めて
奉仕する存念なり」とありました。事実、大五鈷杵・念



凶 鸚 鵡 の 子 の 盲 父 母 の 供 養

仏は王舎城にあり、諸々の比丘に告げられました。

「例えば二つの邪行あり、鞞をけるが如く即座に地獄に墮ちる。その一は父母を供養せざること。その二は父母の所に於いて諸々の不善を為すこと。

また、二つの正行あり、鞞を打つが如くに速やかに天上に生ず。その一は父母の供養を懇ろに為すこと。

その二は父母の所に於いて諸々の善行をなすことなり」と。

諸々の比丘は口々に「世尊は極めてよく父母を讃嘆し給えり」と。

それを聞かれて仏は説かれました。

「父母を讃嘆し供養するは今日のみのことではない。過去世においても然なり」と。

そうして、過去世の出来事を述べられました。

その昔、雪山に一の鸚鵡がいました。その父母は盲なり。鸚鵡の子は常に美しい花やその果実を採りて、先ず父母に捧げることがを心掛けていました。

その頃、一の農夫ありて田を耕し種を蒔いていました。農夫はその時、心に祈っていました。

「此の穀、稔れば諸々の衆生（生きとし生けるもの）に与えて共に瞰食せん」と。

鸚鵡はこれを聞いてこの農夫は施心あることを承知していたので、常にこの農夫の田で稲穀を採取して父母に与えていました。



ある日のこと農夫は稲の苗が育っているか見回りに来て幾多の鳥や虫が穀物をついばんでいるのを目にしたのでした。

農夫は平常心を失い怒りの心を生じ網を張って鸚鵡などを捕らえたのでした。

鸚鵡は驚き怪しんで農夫にいました。

「あなたは穀種を蒔かれるとき稔れば数多の衆生に与えんという素晴らしい心をお持ちでした。

なのに今どうして網をもって捕らえるというようなことをなされるのですか。

私はあなたの優しい心根を知っていましたから、これまで安心して穀種を頂戴していました。どうして心変わりをされたのですか。」と。

鸚鵡はさらに続けて言いました。

「田は母のごとく、穀種は父のごとく、真実の語は子のごとく、田の主は王のごとくなり信じ、擁護は己に由ると思っていました」と。

これを聞いて農夫は驚き問うのでした。

「汝がこの穀を採るは誰の為ぞ」と。

鸚鵡は答えました。

「われに盲の父母あり為にこれに奉らんとするなり」と。

農夫はこれを聞いて感心し、歓喜して言いました。

「今より以後、この田に於いて安心して採れ、疑念を生じること莫れ」と。

仏は告げられました。

「鸚鵡は穀種を楽しむ、

田の主もまた然り」と。

その時の鸚鵡は我身にして、農夫は舍利弗これなり。盲父母はわが父浄飯王と母摩耶なりと。



あとがき

花粉と黄砂の季節が過ぎて今や、一雨ごとに木々の緑が目に見え始める時節となりました。

四月末から五月はじめのゴールデンウィークも平素と変わらない日々でしたが、行楽地は天候にも恵まれて賑わいました。

錦帯橋祭りも七年ぶりに大名行列が繰り出して盛況であった。今年には広家公没後四百年であり何よりでした。先きの頃には吉香公園内に騎馬の銅像も造立されています。

今日の岩国発展の礎は広家公の、岩国山沿いを流れていた錦川を現在のように河筋を変えられての街並みの整備にあることを思えば、広家公の功績をもっと称賛してもよいのではないでしょうか。

広正公に家督を譲って通津に隠居されその二年後の寛永二年九月二十一日に65才で薨去されています。

その没後四百年の年にお寺の移転十年の記念の法要を営むこととなり、深い因縁のようなものを感じないではありません。

移転十年という文言を何度繰り返したことでしよう。移転事業に協力して頂いた方々に、先の父の文言を借りれば、「御恩返しに術もなく」ただただ頭をさげることしかできませんが、それを為すことで住職としての責務を果たしたい一念である。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍

門 寺

吉岡 光 昭



南無大師

生まれ給いし良き日をば

いざや祝わん幾千代までも

岩国市通津3634-3 ☎740-0044

高野山真言宗

宝池山 龍 門 寺 發行

☎0827-38-4611番